

檀信徒各位

十夜法要のご案内

聖名 時下晩秋の候、専心聞法の好季節となりました。
今年も収穫の時期を終え天地の恵みを感謝する頃でもあります。
下記のように十夜法要を勤めます。

ご多忙の処とは存じますが、お繰り合わせご参詣下さいます
ようご案内申し上げます。 合 掌

平成 25 年 11 月上浣

無量寺 住職 堤 俊翁 拜

記

※期 日 平成 25 年 11 月 23 日 (土曜日) 勤労感謝の日

※時 間 午後 1 時より十夜法要御回向 (普通回向)

午後 2 時より^{ふじゅもんえこう}諷誦文回向 (特別回向)、法 話

※布教師 早田 空善 師 (佐賀教区 光明寺)

※ご回向料

普通回向 1 霊 1,000 円以上

特別回向 1 霊 5,000 円以上 ご注意下さい。

初めてお十夜法要を迎えられる霊位、又は特別に志される霊位、
布教師様による^{ふじゅもんえこう}諷誦文回向です。 焼香をしていただきます。

11 月 20 日までに申し込み用紙で申し込みをお願いします。

※お供え米、お供え米料 随意ご志納下さい。

毎日の本尊様のお供え、お花代等にさせていただきます。

※郵便振替等で申し込まれる方も位牌型をお送り下さい。

銀行振込 ゆうちょ銀行 一七九店 当座 口座番号 0016114

法然上人絵伝

第四巻第四段

醍醐寺の寛雅上人から三論宗の奥義を伝わる

豊臣秀吉の茶会で有名な醍醐寺は、貞観十六（八七四）

年に聖宝上人が上醍醐笠取山の山頂に草庵を建て、如意輪准胝の両観音を安置したのが始まりで、東密小野流の中心寺院となった。

聖宝上人滅後、門弟の観賢上人が初代座主となるが、このころから貴族らの参詣が多くなり、便利な笠取山の麓に大伽藍が造立された。これが下醍醐といわれ、鎌倉時代には諸堂が相次いで建てられた。

この頃が法然上人の修行時代である。開山の聖宝上人は、東大寺東南院の院主でもあった。

そのため醍醐寺は開山以来三論教学の拠点でもあった。『四十八巻伝』によると、当

時醍醐には三論宗の大家といわれた寛雅上人がいた。

そこで法然上人は寛雅上人のもとを尋ねて三論の奥義を学ぼうとした。

法然上人が来意を告げると、寛雅上人は無言で奥に引き込み、十個あまりの文櫃を持ち参していうことに「自分にはこの書物を全部伝える弟子がいない。あなたにこれを全部伝えたい」寛雅上人は法然上人がすでに三論宗の奥義に達していることを察知され、自分が大切に集めておいた奥義の書物を伝えたという。



御絵伝の解説

広い庭の一角に築山が見える。さらに散在する石の脇に小木が沿え立ち、庭の広さを物語っている。ここにあかぬけした庵室がある。大木を使用して作られた左右に欄干のある露台を上ると板間になる。その板間の妻戸を入った右手には大和絵を描いた板戸がある。正面には品の良い簾がかかっている。ここに二人の黒衣の僧がいる。法然上人の従僧であろうか。藪戸を上げた部屋には上畳が敷かれ、襖には中国風の山水画が描かれている。その中央に座しているのが寛雅上人である。右手の襖を背にしたのが法然上人である。

釈尊の生涯

比丘尼教団

比丘尼（女性の出家修行僧）教団の統率はすべて養母が釈尊の意を体して、よくその任に当たったので、少しの争いもおおこさなかつたと伝えられている。

またラーフラの母は大変おとなしい性格の人であつて慚愧第一の誉れを高くした。

さきに肉親の者を捨て、同族を捨てて出家した釈尊は、ここにおいて彼らの精神の王国の人として迎え入れ、かつての恨み心をこの上ない喜びに変えさせたのである。

シリーズ お葬式

三、遺体の安置と枕飾り

遺体はすぐには納棺せず、仏間か座敷に北枕に安置します。

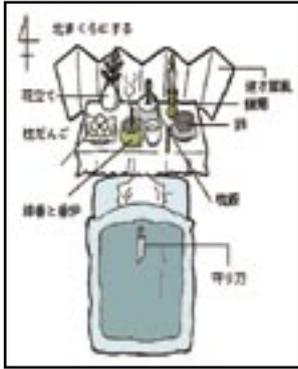
北枕にするのは、釈迦が入滅のときに頭を北に向けておられたことによります。

このとき、遺体の顔には白い布をかけ、手は合掌させ、数珠をかかけます。

遺体に掛けられた布団の上には故人が髪を剃って仏門に入ったしるしに刃が足のほうを向くように刃物をのせておきます。

またこの刃物は魔除けの意味もあるといわれます。

燭台のろうそくの火と、香炉の線香は一晚中絶やさないようにします。



四、枕経

枕経とは、亡くなつていく人を仏弟子にして往生してもらふために、臨終を迎えつつある方の枕元に上げるお経のことです。

現状では、亡くなつたあとにお坊さんに読経してもらうことを意味するようになりました。

枕経は、室内を清らかにし、また臨終の人の心が乱れることのないよう物音などにも気を配り、来迎仏やお名号の掛け軸や屏風を枕元に飾って行います。

カミソリで頭髪を剃り、仏、法、僧に帰依させるのです。そして同時にそのあかしとして戒名を授与してもらいます。

最近では、なかなか臨終の瞬間にお坊さんに立ち会つてお経を唱えてもらうことが難しいこともあるでしょう。

（葬儀のこころ構えと流れ）

う。

そのような時は、家族や親戚で南無阿弥陀仏とお念仏を称えてあげましょう。

看取る人全員で低声で念仏を称え、来世に向かおうとする人に一度でもよいのですから、南無阿弥陀仏と称える力を出させてあげられるようにできれば、それ以上の功德はないでしょう。

そして、本当に臨終の瞬間が来そうな時には清らかな水を用意して、綿または筆で当人の唇を潤してあげます。いわゆる末期（まつご）の水です。

これは死に水ともいい、お釈迦さまが最期に水を求めたという言い伝えによるものとされています。死者に蘇って欲しいという願いと、死後、のどの渇きに苦しまないようにという心遣いからです。また病のせいなどで死苦にせまられてい

る時などは当人の手をしっかりと握りしめ阿弥陀様のご加護を祈りましょう。

幸い病苦に迫られず、静かに臨終を迎えることができるならば、死期を悟つた当人の最後の言葉を聞き漏らさないようにしたいものです。

医師から臨終を告げられた末期の水を終えたら、遺体を清めます。

お釈迦さまはその父の死に臨んで、ご遺体を丁寧に扱われました。

香汁でお体を洗つて、きれいな布に包んで棺に納めました。

これが納棺をする前に湯漕（ゆかん）をするしきたりのものになっています。

お経を学ぼう

秋彼岸法要の住職法話より

さんげ
懺悔のころ (音楽法要)

さんげげ
<懺悔偈> (日常勤行式)

われ	昔より	つくるところの	悪業は	
みな	むさぼりと	にく憎しみと	迷いによる	
からだ	と	ことばと	ころより	生ずるなり
すべて	みほとけの前に	さんげしたてまつる		

我昔所造諸悪業 がしゃくしょぞうしょあくごう

皆由無始貪瞋癡 かいゆうむしとんじんち

従身語意之所生 じゅうしんごいししよしょう

一切我今皆懺悔 いっさいがこんかいさんげ

- ※無始 始まりなき無限の過去より永久に存する。
- ※業 なすこと、なすもの、なす力 精進努力して現状を打破していく自発的行為

三毒煩惱 (さんどくぼんのう)

- ※貪欲 財物などをむさぼり求め飽く事のないこと、煩惱の中でも最も強いもの三毒煩惱のひとつ
- ※瞋恚 いかり憎むこと、煩惱の中でも最も激しく衆生の善心を害し、仏道の障害となるもの
- ※愚痴 仏教の教えを知らず、道理やものごとを如実に知見することができないことをいう
煩惱の中でもっとも基本的なもの

「諸悪莫作 衆善奉行 自浄其意 是諸仏経」

「もろもろの悪をなさず、すべての善を行い 自らの心を浄めよ これが諸仏の教えである」

悪

十悪

身、口、意の三業

- | | |
|----|---------------------|
| 善 | 安穩の性で可愛 (好ましい) 果を招く |
| 悪 | 不安穩の性で非可愛の果を招く |
| 無記 | 善でも悪でもない中性 |
- 身三 殺生 (生き物を殺すこと)
偷盜 (ぬすみ)
邪淫 (邪な性行為、現世後世に悪法を招く)
- 口四 妄語 (うそをつくこと、いつわりをいうこと)
綺語 (けがれた心から発せられたことばのうち
うそ偽り、仲違いをはかる、他人を傷つけることばをのぞくすべて)
悪口 (わるくちをいう)
兩舌 (陰口、中傷、他人の仲を裂くことば、双方の間に不和を生ぜしめる行為)
- 意三 貪欲
瞋恚
愚痴

極悪 五逆と誹謗正法 (真理をそしること)

- 五逆
- 1) 母を殺すこと
 - 2) 父を殺すこと
 - 3) 聖者を殺すこと
 - 4) 仏を傷つけること
 - 5) 教団を破壊すること